

## 2021 年度 個人研究実績・成果報告書

2022 年 4 月 1 3 日

所属	政策情報学部	職名	教授	氏名	榎戸 敬介
研究課題	テンポラリー・アーバニズム				
研究キーワード	ポストモダンアーバニズム、都市デザイン、公共空間、アート、都市観光	当年度計画に対する達成度	3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した		
関連するSDGs項目	11. 住み続けられるまちづくりを	該当なし	該当なし	該当なし	
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>本研究では、第一にテンポラリー・アーバニズムについての学術的議論の把握、第二にテンポラリー・アーバニズムの実践主体との産学共同による実験およびイベント体制の確立、第三に実践的な情報収集のためデジタル・マッピングイベントの実施、以上の3点を主な活動内容として設定した。第一の研究活動については、英語文献やアーバニズム関連のウェブサイトを通じた情報収集により、テンポラリー・アーバニズム（タクティカル・アーバニズムなどとも呼ばれる）がポストモダンの都市デザインあるいは都市論の新しいテーマとして広く認知されるようになってきていることを把握することができた。また、テンポラリー・アーバニズムという概念が直接使われないものの、実態は同概念として分類することができるような都市空間デザインや空間利用が広まりつつある現状についても把握することができた。以上からテンポラリー・アーバニズムが、現代の都市空間デザインに関する理論と実践にとって無視することのできない重要な概念であることを確認することができた。</p> <p>第二の産学共同プロジェクトについては、昨年に引き続き新型コロナ感染の状況から進めることができず、また、同様に第三についてもイベント実施を行うことができなかった。ただし、デジタルマッピングの実験についてはその実践主体から得た情報を参考に必要な装置を用意することができ、テンポラリーな空間形成の可能性と課題をさぐることができた。当初計画していた実験は公共空間で行うものであったが、学内での実験に縮小して行い、テンポラリー・アーバニズム実践の側からの課題と可能性を検証することができた。さらに、デジタルマッピングあるいはデジタルアートといった表現の質の高さを追求するイベントに加え、テンポラリーなアートを防災と結びつけて公共空間を再表現するような社会的メッセージを送る試みも世界の都市で展開されつつあることを確認した。</p> <p>2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）</p> <p>【論文（査読あり）】なし</p> <p>【著書・論文（査読なし）】なし</p> <p>【学会発表等】なし</p> <p>3. 主な経費</p> <p>文献収集、実験のためのポータブルバッテリーなど。</p> <p>4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）</p> <p>科学研究費 基礎研究 (C)：平成 29 年~令和 4 年度 代表「文化的消費主導の都市計画論：グローバル都市におけるエンクレーブの役割と意義」(17878483)</p>					

(本文は2ページ以内にまとめること)